**「兼盛と忠見」～和歌説話を読もう～**

 (　　)年(　　)組(　　)番　　名前(　　　　　　　　　　)

のの時、・、ににて、にひてけり。といふ題を給はりて、忠見、「名歌よみでたり」と思ひて、「兼盛もいかでこれの歌よむべき」と思ひける。

恋すてふがはまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか

　さて、ににてじて、ぜられけるに、兼盛が歌に、

　つつめども色にでにけりが恋はものや思ふと人の問ふまで

に名歌なりければ、、判じかねて、くをうかがひけるに、、忠見が歌をば、ありけり。兼盛が歌をば御詠あけりる時、「天気にあり」とて、兼盛勝ちにけり。

　忠見、心く覚えて、胸ふさがりて、それよりの付きて、み無き聞こえて、兼盛ひければ、「の病にあらず。の時、名歌よみだして覚えりしに、殿の、『ものや思ふと人の問ふまで』に、『あはや』と思ひて、く覚えしより、胸がりて、かくり侍り」とて、に身まかりにけり。こそよしなけれども、道を執する習ひ、げにも覚えて、れなり。共に名歌にて、『』にれられて侍るにや。

※「沙石集」巻第五末ノ四「歌に命を失ふ事」新編古典文学全集５２より

天徳の歌合の時、兼盛と忠見が共に御隋人(近衛府の官人)として左右に一対となった。「初恋」という題をいただいて、忠見は「名歌を詠み出せた」と思って、「兼盛もどうしてこれ程の歌を詠むことが出来ようか」と思った。

　恋すてふ…（恋をしているという私の浮き名はすでに人

のうわさとなってしまった。人に知られないよう

にひっそりと想っていたのに）

そして、既に御前で講じ、判が下されようとしていたが、兼盛の歌に、

　つつめども…（忍んでいたけれども外に表れてしまった

よ、私の恋は。物思いをしているのかと人が問う程にま

で）

共に名歌であったので、判者は判を下しかねて、しばらく帝(村上天皇)の御意向をうかがっていたが、帝が忠見の歌を二、三遍口ずさまれたが、兼盛の歌を何遍も口ずさまれたので、「帝の御意向は左にある」と兼盛が勝ちとなった。

　忠見は落胆し、胸がふさがるような思いをして、それから不食の病になった。快復の望みがないとの話を聞いて、兼盛が見舞いに訪れると、「病気というのは、実はほかでもない、御歌合の時、名歌を詠み出したと思いましたのに、あなたの『物思いをしているのかと人が問う程にまで』という歌を聞いて『ああ』と驚き、胸がふさがってこのように重くなったのです。」と言って、ついに亡くなってしまった。執心はつまらないことであるけれども、道に執着する習いはもっともだとも思われて哀れである。共に名歌で、『拾遺集』に入れられているのでしょうか。

【注】

・つつめども…「拾遺集」「袋草紙」ともに、初句は「し

　のぶれど」になっている。

・この話は「沙石集」以前には所見がなく、作者・無住の

創作の可能性も考えられる。